

## JASC 第 8 回定例会

### 若手の会グループ ディスカッションのまとめ

JASC 若手の会の発表「学生と広げるサイエンスコミュニケーション」をもとに、学生サイエンスコミュニケーターの存在によってどのような活動が展開されうるか、あるいはどのような活動が求められているのか、といったことを中心に話し合いました。ワールドカフェ形式で 3 グループとディスカッションを行わせていただきましたので、そこで議論された内容をそれぞれ以下にまとめます。

#### 【1】

サイエンスコミュニケーターは任期制の職がほとんどであり、ひとつの研究所などで長期雇用されてその場所での専門家としてスキルアップすることはできない。そうして、いつまでたっても研究者とコミュニケーターとの間の溝が埋まらないという現状がある。

サイエンスコミュニケーターの能力が活用できる場として、学会のファシリテートも考えられる。研究者は普段やりなれていないので、スキルのある人がやった方が良い議論ができそう。

たとえばこれを学生サイエンスコミュニケーターがやったらどうか。場内整理だけではない内容的な方法論としてのニーズがある。さらには、アウトリーチの請負団体をつくらどうか。アウトリーチ請負団体の学生が、学会主催の研究室の学生との協力体制をつくり、研究室の学生にはアルバイトとして学会の運営をさせる。

#### 【2】

教育現場でのサイエンスコミュニケーションとして、実験アシスタントや個人サイエンスコーチ、先生の補助、総合学習や SSH の探求活動としての取り組みなどが挙げられる。こういった活動に学生が携わらせてもらうことによって、教育のプロである学校の先生から、知識や技術的な面での良い影響が受けられ、教育現場の人手不足や時間不足の解決にもなる。

こうした学生の活動において最も重要なのは資金不足の問題であり、主に企業と協力して活動することによって解決されうる。企業としてもメリットが感じられるような協力体制とはどのようなものか。企業に困難なのは、教育現場に直接切り込むことである。学校は特定の企業とのつながりを持つとはしないのである。そこで、企業と学校の間にクッションとして学生のサイエンスコミュニケーション団体が入ることによって、企業に教育現場へ切り込むチャンスを与え、学生は企業の支援を得ながら学校とともにプログラムを動かすというようなことができるかもしれない。このように、学生は”ハブ”として機能することができる。

学生のうちにサイエンスコミュニケーターとしてさまざまな活動を行うことができたとしても、個人レベルでの継続が難しいため、学生でなくなったときに継続できなくなる場合が多い。しかし、あらゆる職種の中にサイエンスコミュニケーターの職能が求められている。隠れコミュニケーターの職業にどういったものがあるか、就職を考える学生にもわかっていないし、企業側もどのような能力を持った学生がいるのかわかっていないので、若手の会がリサーチをして、学生サイエンスコミュニケーターのキャリア形成のための情報をまとめることができると良い。

### 【3】

サイエンスコミュニケーション活動は、社会全体的なコミュニケーションスキルアップにもつながる。社会においては、人は常に何かのコミュニケーターになるのであるから、大学でサイエンスコミュニケーション活動を行った学生は、必ずしもサイエンスコミュニケーターを直接の職業に求めなくても良いし、専任ではなく兼任で行うことも可能なはずである。専門にこだわらず、自分の置かれた立場でコミュニケーションを切り開いていけばよい。

地域の科学イベントには、子供や地域のサイエンスコミュニケーション団体、退職者の人材等、あらゆる人を巻き込むことができる。大学生がイベントを主体的に行うことによって、上の世代と若い世代(子供)をつなぐ役割を担うことができたり、中高生に憧れを抱いてもらえるような子供たちに夢を与える活動となる。(cf. 青少年のための科学の祭典) また、若い人が頑張ることによってあらゆる世代の人にパワーを与えることができるという期待もある。

当日ご参加いただきました皆様、非常に濃密な議論をさせていただきありがとうございました。今回いただいたご意見を参考にしながら、若手の会は「学生と拓げるサイエンスコミュニケーション」の全国での実践を目指し活動していきます。

(文責：JASC 若手の会 黒木彩香)